

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370063

研究課題名(和文)8-10世紀インドにおける主宰神論争史研究

研究課題名(英文)A study of the history of Isvara discussion in 8-10 century in India

研究代表者

狩野 恭 (KANO, Kyo)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：70204592

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：第一の課題であった、8世紀仏教における哲学全書の性格を有する、シャーンタラクシタ、カマラシーラ師弟による『タットヴァ・サンクラハ』『同パンジカー』の主宰神論については、試訳については、ほぼ完了した。校訂テキストの作成、訳注については、継続的に実施している。第二の課題としてのニヤーヤ学派側の主宰神論として重要な『ニヤーヤ・マンジャリー』については、インドへの現地調査によって必要な資料の収集はほぼ完了した。試訳段階は終了し、校訂テキストと英訳作業、訳注をつける作業が残っているが、作業を継続している。また、写本の検討により多くの文献学的かつ内容的にも問題があることが浮き彫りとなった。

研究成果の概要(英文)：With reference to the first subject, a study of the Isvara discussion in Tattvasamgraha, a philosophical and comprehensive treatise by Santaraksita and Kamalashira of the Madhyamika school, tentative translation is finished. I continue critically editing and giving commentaries to the translation.

As for the second subject, a study of the Isvara discussion in Nyayamanjali, one of the most important texts of the Nyaya school after Dharmakirti, I have collected significant materials including manuscripts by visiting several institutions and universities in India. A preliminary translation is almost finished, leaving the work of making critical edits and giving commentaries. Through careful investigation of several manuscripts, many philological and philosophical issues are revealed.

研究分野：インド思想史

キーワード：主宰神 インド論理学

1. 研究開始当初の背景

【インドにおける〈神の存在論証〉の思想的意義】

インドにおける主宰神論(有神論)論争は、世界観、倫理観の基本となる絶対的存在としての恒常、永遠な主宰神の存在を主張し、その存在を論理的に論証することをとおしてヒンドゥー教特にシヴァ派の理論的基盤を作った(A)ニヤーヤ学派、ヴァイシェシカ学派と、そのような絶対的存在を否定しようとした(B)仏教側との論争である。この論争は、西洋において、古くから連綿と続けられた、いわゆる「神の存在論証」のインド版と呼ぶにふさわしく、その解明はインド思想史上のみならず、西欧をも含む有神論思想史全体としても極めて重要である。

【インド論理学・認識論と〈神の存在論証〉】

インドにおける論理学・認識論研究は、仏教思想、ヒンドゥー教の思想を解明する上でも、極めて重要である。それは、仏教にとっての基本的世界観である「刹那滅論」やヒンドゥー教の世界観としての「有神論」など、それぞれの基本教義に直接かかわっているからである。また、仏教の思想は、「縁起」や「刹那滅論」など認識論や論理学にかかわる要素を強くもっている。したがって、それらの解明は、直接に、それらの基本的教義の解明につながる。「主宰神の存在論証」をめぐる論争は根本的教義をめぐる論争であり、論理学・認識論上の根本にかかわる議論である。

【インドにおける〈神の存在論証〉の歴史とシャーンタラクシタ、カマラシーラ】

インドにおける〈神の存在論証〉とそれを否定する仏教側との論争は、歴史的に2度頂点を迎える。1度目はニヤーヤ学派のウッデョータカラと、インド仏教論理学・認識論に関して最大の思想家であるダルマキールティの時代(7Cごろ)である。本研究課題の対象とした2種のテキストのうち、第一の『タットヴァ・サングラハ』『同パンジカー』は、中観派に属するシャーンタラクシタ、カマラシーラ子弟による仏教内外の諸学派の諸理論を網羅的に批判する、いわば、当時の百科全書的性格を有するものである。同書における主宰神批判の章は、プラクリティ、アートマン、プルシャなど恒常的存在を批判する、同著作の冒頭部分の7章の中の2番目に位置し、主宰神批判に関して、ダルマキールティの思想、論理学、認識論の影響を強く受けた内容となっている。

【インドにおける〈神の存在論証〉の歴史とジャヤンタ・バッタ】

神の存在を論理的に論証しようとするにニヤーヤ学派は、仏教側からダルマキールティによって根本的な批判を受けることになるが、これに対抗して、この論証を発展させたのは、バーサルヴァジュニヤ、ジャヤンタ・バッタ、トリローチャナ、ヴァーチャスパティミシュラといったニヤーヤ学派の論

師たちであった。特に、このなかで、ジャヤンタ・バッタは、思想的にも、論理的にも、最も重要な位置を占めているといっても過言ではない。

【欧米、特にウイーンにおける近年の研究】

この論争に関する本格的な研究は、1960年代に、ウイーンにおいて主に始まった。チェンパラティ(George Chemparathy)は、1963年にウイーン大学に学位論文を提出して、主として(A)についての研究をまとめた。しかしながら、この研究では、ジュニャーナシュリーミトラについては触れられていない。また、同じウイーンで学んだシュタインケルナーは、学位論文を同じ1963年に提出し、主宰神論の論理的な部分に言及した。他方また、同じくオーバーハンマーもその宗教的関心から主宰神に関する論理学的問題、宗教的問題を取り扱った論文を発表した。1972年チェンパラティは(A)の代表作である『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』研究の一定の成果をまとめ出版した。さらに、近年、クラッサー(Helmut Krasser)は、仏教側からの主宰神批判を主に、これまでの成果を文献学的に整理し提示する形で2002年、その研究を出版した。この研究は、これまでの主に西欧における主宰神論及び仏教認識論・論理学研究の成果の上に成立しているものであり、現在の西欧における主宰神論研究の到達点を示すものである。しかしながら、この研究は、仏教側からの解明という色彩が強い点、さらには我が国における主宰神論研究に対する認識の不十分さ、また、ポイントなる主宰神論証批判に関する視点等、いくつかの重要な問題点を有している。

【国内における研究】

一方、国内においては、宮本啓一氏や石飛道子氏などが、主として論争の前半期(7C)のウッデョータカラについて個別的研究を発表しており、また、稲見正浩氏はダルマキールティ研究の一部として、その主宰神論証批判部分の試訳を試みている。また、近年、若手の研究者によって、いくつかの論文が発表されている。しかしながら、特に本申請によってめざす(A)ニヤーヤ学派、ヴァイシェシカ学派側、(B)仏教側、双方の側からの総合的研究はまだなかった。

2. 研究の目的

本研究は、インドにおける、仏教徒と非仏教徒(特にヒンドゥー教の哲学的基礎を担った人々)との間に行われた「主宰神」の存在をめぐる論争、特にインドにおいて発展した論理学を手段として展開された論争を仏教・非仏教両側からの文献によって歴史的に明らかにすることである。特に、8世紀この論争に関する極めて重要な著作を残した、シャーンタラクシタ、カマラシーラ師弟による『タットヴァ・サングラハ』、(TS)『同パンジカー』(TSP)の「主宰神論」及び、ニヤーヤ学派で9世紀にカシミールで活動した

ジャヤンタ・バッタの『ニヤーヤ・マンジャリー』(NM)の「主宰神論」の解明(校訂テキストの作成と英訳、訳注の作成)をとおして、インドにおけるダルマキールティ以後のこの論争に関わる仏教・非仏教双方の思想史上、論理学上の発展の特質を文献学的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、シャーンタラクシタ、カマシーラの著作『タットヴァ・サングラハ』、(TS)『同パンジカー』(TSP)の「主宰神論」の章、ジャヤンタ・バッタの『ニヤーヤ・マンジャリー』(NM)の「主宰神論」の部分に焦点を絞り、批判的テキストの作成、その内容の解明することによって、これらの人々の主宰神論争史上の役割、思想的意義を明らかにすることを試みた。具体的方法として、以下の3点を中心に研究を進めた。

(1)『ニヤーヤ・マンジャリー』(NM) 写本の調査、収集と「主宰神論」の批判テキストの作成

NM『主宰神論』の現在の校訂テキストは、限定された写本に基づいており、最も重要とされる写本を用いていない。Alessandro Graheli (2012) はNM について18の写本に言及している。すでに収集済みのものに加えて、重要な数点を含みできるだけ多くの写本集め、それらに基づいて、校訂テキストを作成する。

(2)『タットヴァ・サングラハ、同パンジカー』(TS, TSP)「主宰神論」の批判テキストの作成

TS, TSP については、写本、チベット語訳などを基にして、校訂テキストを作成する。

(3) TS, TSP, NM「主宰神論」について批判テキストに基づく英訳と訳注の作成

上記の校訂テキストに基づいて、3テキストについて英訳と訳注を完成させる。

さらに、上記に基づいて、ダルマキールティの主宰神批判の本質的意味をもう一度再検討するとともに、ダルマキールティ以後のニヤーヤ学派における反論の論理構造を明らかにする。

4. 研究成果

<個別の成果>

(1)『ニヤーヤ・マンジャリー』(NM) 写本の調査、収集については、数回のインド、本研究期間以前のヨーロッパにおける調査によってほぼ目的を達成することができた。校訂作業は、写本の系統の分析を再検討する必要が判明したため、継続中である。

(2)『タットヴァ・サングラハ、同パンジカー』(TS, TSP)「主宰神論」の批判テキストの作成については、一定程度の作業は終え、チベット語との対照を継続している。

(3) NM については英訳の試訳が終了した。TS については試訳の作業中である。また訳注は部分的に完成しているのみとなっている。

る。

本研究によって、いくつかの重要な点が明らかとなった。第一点は、TS には、ウッドヨータカラ以外の論師の主宰神論が記されているが、それらの論師たちの年代についていくつかの情報が提供された。第二に、ジャヤンタ・バッタの主宰神論と、ジャヤンタ・バッタに近い年代のニヤーヤ学派の論師、バーサルヴァジュニヤ、トリローチャナ、ヴァーチャスパテイミシュラの主宰神論の関係についてもいくつかの情報が提供された。

<成果の総括と今後の展望>

個別的作業は時間の問題であり、完成への障害は少ないと考えられる。ただ、NM の写本を詳細に検討してみると、予想外に多くの問題点が浮き彫りにされた。今回取り扱わなかった、主宰神論の部分を除く NM の他の写本についても、写本の系統を調査する上では、検討が必要となる可能性もある。内容の分析に関しても、予想以上に多くの問題点が明らかとなった。特に、ジャヤンタ・バッタと近い時代のニヤーヤ学派の論師、バーサルヴァジュニヤ、トリローチャナ、ヴァーチャスパテイミシュラの関係について、さらには、仏教側のジュニャーナシュリーミトラとの関係についても再検討が必要であると考えられるが、これらの他の論師の著作については、すでに一定の研究を終えているので、今後より詳しい分析が可能となると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①「インドにおける主宰神の存在論証をめぐる論理的諸問題」、狩野恭、『インド哲学仏教学研究』インド哲学諸派の<存在>をめぐる議論の解明、第22 特別号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部、インド哲学仏教学研究室、191-214, 2015. [査読あり]

[学会発表] (計3件)

① Kyo KANO, On the opponent and the background of the Īśvara discussion in Bhāvaviveka's Madhyamakahdayakārikā, International Workshop on Bhāvaviveka and Hetuvidyā, A special section of the 2nd International Symposium on Hetuvidyā, Hangzhou (杭州), China, 2017.7.

② Kyo KANO, The Logical Structure of the Indian Proof of the Existence of God --The level of vyāpti --, Templeton International Workshop: Realism/Anti-Realism, Omniscience and God/No-God, University of Hawaii, Hawaii, 2017.3.

③ Kyo KANO, On the origination of the concept of dravya as dharmin,

International Conference on Recent Trends
in Buddhist Research, Zhejiang University,
Hangzhou (杭州), China, 2016.10.

〔図書〕（計 3 件）

① Kyo KANO, Jñānaśrīmitra on
viparyayabhādhakapramāṇa”, *Proceedings of
the Fifth International Dharmakīrti
Conference*, Heiderberg, Österreichische
Akademie der Wissenschaften, 1–12, 2018.

<掲載確定>

② Kyo KANO, On the origination of the
concept of *dravya* as *dharmin* , *Proceedings
of the International Conference on Recent
Trends in Buddhist Research*, Zhejiang
University, 2016.10, 杭州, 1–18, 2018.

<掲載確定>

③ Kyo KANO, The Logical structure of
the Indian Proof of the Existence of God,
--The level of *vyāpti* –, *Proceedings of the
Templeton International Workshop:
Realism/Anti-Realism, Omniscience and
God/No-God*, 1-22, 2018. <掲載確定>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狩野 恭 (KANO, Kyo)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：70204592